前立腺肥大症と下部尿路症状の自然史の解明

舛森　直哉、福多　史昌、塚本　泰司、泌尿器科学講座

札幌医科大学泌尿器科学教室では、高齢男子における下部尿路症状および前立腺肥大症の罹患率を算出する目的で1992年から1993年にかけて北海道島牧村において40-79才の全男性住民を対象にcross sectional community-based studyを行っている。本検討により得られた結果は、国際比較に足る本邦における唯一のデータとして数多くの論文に引用されている。

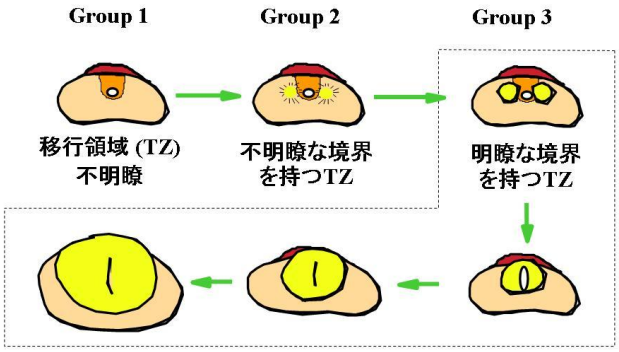
島牧村横断研究の結果のまとめ

高齢男子における排尿症状および前立腺肥大症の有病率 (Community-based studyによる検討)

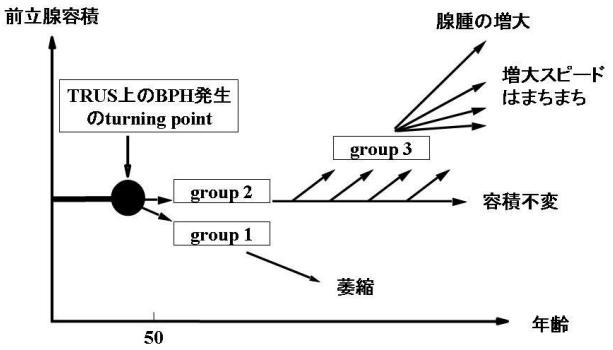
年齢	(1) IPSS 8点以上の割合	(2) 推定前立腺容積 20mLを超える割合	(3) 最大尿流率 10mL/秒未満の割合	(4) 有病率 (1) + (2) + (3)
40-49	47	20	4	2
50-59	44	35	6	2
60-69	52	39	19	6
70-79	63	37	42	12

*IPSS：国際前立腺症状スコア

経直腸的前立腺超音波断層法上の前立腺内部構造



前立腺内部構造パターンから推測した前立腺肥大症の自然史



今後の研究では、初回受診より約15年経過後の下部尿路症状、前立腺容積および尿流率の変化を縦断的に検討し、本邦における高齢男子における下部尿路症状/前立腺肥大症の長期的な自然史を明らかにする予定である。以上により、前立腺肥大症に対する適切な治療時期の特定が可能になると考えられる。